

最も古の外来語

豊 泉 淸

外来語を素直に解釈すれば、外国から入ってきた言葉と言葉と定義できない。あるとある外来語の元の外国語は何語か、この時代に日本に伝えたか、どんな経緯で日本語に定着したかと云ふ、三つの観点から考察を加える必要がある。それで身近な外来語を選んで身元調べを試みてみた。

現代国語は外国語や外来語をカタカナで表記するのが原則だが、明治時代には外来語を正統から漢字に置き換えた風潮があった。子供の頃から表酒(ボトル)、燐才(マッシュ)、瓦斯(ガス)、硝子(ガラス)、煙草(タバコ)、煙管(キセル)、基督(キリスト)、酒精(アルコール)、金絲雀(カナリヤ)、提琴(バイオリン)、駒鹿(トナカイ)、仙人掌(サボテン)などとこの漢字表記を残した記憶がある。因みに浪漫せ ROMANCE(ロマンス)、画廊 GALLERY(ギャラリー)

一) ① 簿記せ BOOK KEEPING (ブック・キーピング) の漢訳が記された。漢字の漢語のより上見えるが、実は英語の発音に據つていて、明治時代に日本人が創案した新しい漢字表記である。

また明治時代には英語の意訳も試みられた。

PHILOSOPHY の翻訳や ECONOMY の翻訳は明治時代に西洋の文化人が創案した新語にから僅か百年少々の歴史しかな。PHILO せ精神かね SOPHY せ知識と云ふシラシヤ語に出来て、フィロソフィーを直訳すれば「知りじむを好む」と云ふ意味になる。またECO せ家を NOMY せ法則を意味するキリシヤ語に由来するかど、HOMELIE せ「家庭を支配する法則」と云ふ直訳になるせうである。明治時代の知識人は漢文の造詣が深かつたようだね。

余談だが、中国語は全て漢字で表記されるから、外来語も片端から漢訳していく。電燈(トラン)、電脳(ロボット)、導弾(ミサイル)、独軌車(モノレール)、山東製糖機(ジャンボ・ジャパン機)などは漢字の翻し出る素因縁から日本人でも何となく理解できる。「カーラー」を中国では「可口可樂」と漢訳している。中国語で発音する「あたかも」カーラーの音の上に置いたので、「ローラー」樂つねぐし」と解釈でせぬか、発音と意味の固有か、商品の意味も兼ねて「可口可樂」の略称だと私は詮程つてこそ。

現在の外来語は戦後の米国の影響によつて、大半は英語に由來する。日本語には原子弹爆発所を原爆、健康保険を健保、土木建築を土建、私立大学を私大のようにして短縮して使い、言葉が無数にあり、長い綴りの英単語もやはり日本語風に短縮して使い傾向がある。

エトロフ (エントリッシュン) 調節
パンロー (パンローター) 電算機
ゼネロー (ゼネラリスト) 建設
リモート (リモート) 制御
マザーフローラー (マザーフローラー) 等感
「」で終わる略語がこくつもある。語尾の「ン」だけは共通だが、元の英語は全て異なる単語である。若い世代が本来の英語の意味も知らずに最初からカタカナ表記の略語だけを口にしている。日本語も浅薄な理解で終わつてしまい、言語感覚が鈍麻すると私は危惧している。

明治維新の開国政策により、西欧の文物が怒濤の如く日本に流入してきた。アレルギー、エネルギー、イデオロギーなどのドイツ語や、オペラ、ピアノ、ソプラノ、テンボ、ピッコロなど、音楽領域のイタリア語や、アトロエ、テツサン、ボーズ、モチーフなど、美術領域のフランス語は、その分野の専門家でなくても容易に理解できるほどなく、一般庶民の間に定着している。アレルギーやエネルギーなど、ドイツ語の

発音が先に定着してしまったので、後から導入されたアラジーヤエナジーといつ英語の発音は日本語に定着できずにして、因みに登山やスキーに関する用語はドイツ語が多い。ドイツ語圏のオーストリアから最初に技術や知識が導入されたためと言われている。ゲレンデ、ヒュッテ、シャンツェ、アイゼン、ザイル、ボーゲン、シュバールなど、登山やスキーの愛好家の間ではじく普通に使われている。

徳川幕府の鎖国政策でポルトガルやスペインの貿易商が追放され、オランダが長崎の出島で日本との貿易を独占した。オランダの文化が日本に流入し、無数のオランダ語が外来語として定着した。メス、オブリート、ピント、スポット、「丁」、「ツップ」、「スコップ」、「ランドセル」、「アルコール」、「エーテル」、「ビール」、「コーヒー」など、オランダ語由来と氣付かずについでいる言葉が意外に多い。メスを入れる「オブリート」に包むピントがまけるなど、オランダ語由来の外来語を含む慣用表現もある。

オランダ語 英語
ビール ビア
コップ カップ
スコップ スケープ
生ビールのビールはオランダ語風の発音で、ビアガーデンのビアは英語風の発音である。二ヶ国語の発音が同時に存在

していて使い分けている珍しい例である。

オランダ語の「コップ」は水を飲むガラス製の容器を指し、英語の「カップ」はスポーツの優勝杯や、即席麺の容器などを指し、明らかに使い分けがなされている。昨今はアルコールを飲むガラス製の容器を「グラス」と呼ぶ人が多くなり、「コップ」はやや古臭い印象を受ける。

オランダ語由来の「スコップ」は土を掘る工具を指すが、最近は英語のシャベルの方が一般的である。スコップに相当する英語は「スコープ」で、新聞社の特ダネという意味で使われている。他社を出し抜いて未知の情報を真っ先にスコープで掘り出したといった状況の描写と思われる。オランダ語由来のスコップと、英語由来のスコープは同じ単語だが、発音やカタカナ表記が異なるために全く別の言葉と思っている日本人も多い。

室町時代にポルトガルの宣教師や貿易商が渡来し、日本にポルトガル文化を伝えた。パン、カステラ、ボタン、カルタ、タバコ、カッパなど、四百年以上も使い続けているが、外国語異さが全く感じられない。日本語に定着した西欧語由来の外来語の中では「ポルトガル語が最も古」。

城郭の中心部にある高層の建物を「天守閣」といつ。ポルトガル語で神を意味する「DEUS(デウス)」が訛つて天守と漢字で表記したと言わっているから、天守閣もポルトガル語由来の

外来語と見なせる。

「ウンともスンとも言わない」という表現がある。全く反応を示さず、何の応答もない状態を表す言葉である。ウンは「1」を、スンは合計や集計を意味するポルトガル語に由来するという語源説がある。つまり最初から最後まで何も言わないと解釈できる。

他人の収入の一部分を奪つてしまつて行為を「ピンはね」という。ピンは英語の「POINT(点)」と同じポルトガル語に由来し、最初や最上のものや頭という意味でも使われるようになつたと言われている。オランダ語のメスを入れるや、オブラーートに包むなどと同様に、ポルトガル語も天守、ウンともスンとも言わない、ピンはねなど、妙な所で使われている。

日本語の中の外来語は、ポルトガル語、オランダ語、英、独、仏、伊など、西欧諸国語が圧倒的に多いが、労働の達成

目標という意味のノルマや、鮓ネタのイクラはロシア語に由来する。また市場のバーザはペルシャ語が、調味料のケチャップはマレー語が語源とと言われており、少數ながら珍しい国語の言葉に由来する外来語も混じっている。

長い歳月を費やして複数の外国語に由来する外来語が定着したために、日本語は語彙が豊富になり、表現力も幅広くなつた。そもそも日本語の語彙が源氏物語や枕草子などに登場する純粹の大和言葉だけだったら、現代の政治や経済や科学な

どは全く表現できなかつたと思われぬ。外国語の濫用は嘆かわしことに一つ人もいるが、外国語を消化・吸收して語彙を増やし、自家樂籠中のものとして駆使できるの遠の深さは、日本語の長所だと私は高く評価している。

一、世紀の中じかに田済の王仁といつ人物が仏典や千字文を我が國に伝えたといつ歴史の記述がある。漢字で書いた中國語が日本に伝えられたから、理論的には外来語の定義に当てはまるが、習慣的に漢字や漢語は外来語とは呼ばない。

達磨（だるま）と久遠（くおん）と新羅女（わいつこやくなんこよ）といつ読み方に何か共通点があるだろつか。達は発達、上達、達人、達筆など、常に「たつ」と読むが、達磨の達に限つて例外的に「だる」と読む。実は韓國語でも達磨を「ダルマ」のよつて發音する。また久遠も韓國語で「クオン」のよつて發音し、男女（なんこよ）も「ナムニ」のよつて發音する。つまり達磨や久遠や男女（なんこよ）など、仏教用語の読み方は、韓國語の發音が日本語に定着したと考へてよ。つまり達磨や久遠も韓國語由来の外来語と見なせる歴史的に見ると、古の人物が日本に漢字を伝えたから日本人は最初に韓國語風の發音で漢字を学んだといつ假説が成り立つ。

日本語の漢字の読み方には、眞音、漢音、唐音の三種類ある。国語の授業で教わった。

漢音	明	京	兵	正
吳音	めい	けい	へい	せい
韓國語	ミョン	キョン	ビョン	ジョン

漢音読みよりも韓國語読みの方が遙かに韓國語の發音に似ている。吳音読みは仏典と共に田済の人が最初に日本に伝えた發音だから、韓國語に似てゐるのも当然である。

漢音は吳音よりも後の時代に日本に伝えられた。日本語の漢字の読み方が複雑なのは、吳音と漢音が共存しているためである。例えば、京葉線の京は「けい」と読み、埼京線の京は「きょう」と読み。行列の行は「きょう」と読み、行進の行は「けい」と読み。もし漢字に一字一音の原則が貫かれていれば、国語字體は極めて楽である。

北海道の鉄路連原に棲んでおり、天然記念物に指定されていの「丹頂」といつ鶴を韓國語で TURUMI のよつて發音する。日本語化するとシルミのよつて聞いだら、鶴見とこの地名は恐らく丹頂が棲んでいる土地に由来すると思像できます。また佐渡島に棲んでおり、やはり天然記念物に指定されていの朱鷺（トキ）といつ鳥を韓國語で TAOCHI のよつて發音するか、トキの語源も韓國語と思われる。朱鷺は朱色の鷺と云つて日本風の宛字である。

子供の頃「ベーハマ」と云つ玩具で遊んだ想い出がある。

ベーハマを漢字で「田舎樂」と書せば田舎を「ベー」と読むから、韓国語の貝の発音の「ペー」に由来すると言えられる。現在のベーハマは鉄製だが、昔は恐らく田舎形の着頭の田舎を利用した独楽だつたに違いない。

群馬県に小暮（こぐれ）と読む地名がある。高句麗の韓国語の発音の「コグツコ」に由来するといふ古代史の語源説がある。韓半島から渡来した人々が開拓した土地と讀われている。

群馬県に勢多（せた）といふ地名もある。韓国語で鉄を加工場所や土地をさあることは「發音するから、セタは鉄の場所、つまり鉄を探掘する場所や、製鉄所が存在する場所と解釈できる。実際に勢多といつ地域で、古代に鉄を加工した工房の跡と思われる遺跡が発掘されていて、全国各地に瀬田や瀬戸と書く地名がいくつもあるが、やはり韓国語の鉄に関連のある地名と解釈ができる。

埼玉県に顔振（ひづぶつ）と読む縣がある。くねくねと曲がつてこる状態を表す韓国語の「ハフル」に由来すると言われてこる。曲がりくねつてこる山道を描す韓国語の「ハフル」に顔振といつ漢字を当てたと解釈される。

瞬間に光るピカリや、背が高いうノッポも、韓国語に同じいみつな発音と意味の単語があるから、ピカリやノッポも韓国語由来の外来語と見なせぬ。熊（くま）、島（しま）、鍋（な

ベ）、蜘蛛（くも）なども韓国語に同じいみつな発音である。私の住む高崎市の郊外に觀音山といつ小高い丘陵地帯がある。子供の頃は「觀音」を田舎名遣いで「くわんのん」と表記していた。関、宣、冠、寔、貫なども田舎名遣いでは「くわん」と仮名を振っていた。但し看、千、間、幹、簡などは田舎名遣いでも現代国語と同様に「かん」と仮名を振った。現代国語で「かん」と仮名を振る漢字を歴史的仮名遣いではなぜ「くわん」と「かん」と書き分けていたのだろうか。そして前掲の漢字の韓国語の発音を調べてみた。

韓国語 日本語

KWAN くわん 觀 開 官 冠 實
KAN かん 看 千 間 幹 簡

驚く勿れ。韓国語の KWAN と KAN といつ発音が、旧仮名遣いの「くわん」と「かん」と完全に一致している。つまり「くわん」といひ表記せよ。韓国語の発音の忠実な描写と断言して間違いない。昔の日本人は韓国語の「くわん」と「かん」の違いが識別できたから、異なる仮名表記を当てたと思われるが、「くわん」は元来日本語に存在しない外来の発音だから、時代の流れと共に淘汰されて消滅してしまい、につしかかん」に一本化してしまったと推測できる。韓国語には仮名文字でウワ、ウイ、ウハ、ウオなどによつて書ける母音が何種類もあり、母音の数が日本語よりも遙かに多い。私が

小学生の頃は、ワ行を「わゐわゑを」と習っており、現在は消滅してしまった「ゐ」と「ゑ」とこの仮名文字も教わった。「い」と「ゐ」や、「え」と「ゑ」や、「お」と「を」も昔は異なる発音だったと思われる。発音が異なるからこそ、異なる仮名文字を創案して表記したはずである。

葉(えふ) 甲(かふ) 仰(がふ) 劫(じふ) 集(しふ) 雜(ぞひふ) 答(たふ) 塔(たふ) 法(ほふ) 入(にふ) 立(りふ) など 現代国語で「ひ」と書くが、歴史的仮名遣いで「ふ」と書く漢字があった。韓国語は日本語と異なり、子音で終わる単語がある。例えば「ひ」で終わる発音は、日本人の耳には「ふ」のよう聞こえる。前掲の「ふ」と書く漢字の韓国語の発音は全て「ビ」で終わっており、歴史的仮名遣いと韓国語の発音がぴたりと一致して「ゐ」「くわん」と「かん」の関係と同じように「ふ」と書いた漢字も韓国語の発音の忠実な描写と考えられる。一般庶民の日常生活に縁の無い過去の遺物となってしまった歴史的仮名遣いは、韓国語の発音を忠実に反映してこの貴重な言語学の歴史的資料として活用できること私は評価している。

私どもは外来語じこと、カタカナで書く西欧語だけと考えがちで、歴史を遡っても江戸時代のオランダ語や、室町時代のポルトガル語しか論じないが、仏教用語の読み方や、日本各地の地名や、歴史的仮名遣いの分析から、日本語に影響

を「えた最も古い外来語は韓国語といつ持論を強調してみたい。古代日本史の謎を解く方法論の一つとして、日本語に定着した韓国語といつ視点も欠かせないと私は考えており、大いに興味を持つて独学で韓国語の洋題に情熱を傾けている。

余談だが、日本語の語彙の中から、カタカナで書く西欧語の外来語と、中国語に由来する漢字語と、韓国語が語源と思われる単語を除けば、残りは純粹の大和言葉と定義できそうだが、果たして純粹の大和言葉と断定できる言葉が、日本語の語彙の中でどのくらいこの比率を占めているのだろうか。日本語の語彙は数十世代に亘って醸成された混血語だと私は空想してこる。生物学の領域に純種強勢という概念がある。純血種より雜種の方が強い生命力を持つて居るとこの認識である。今後も外来語として新しく定着する語彙が増えて統ければ、日本語の未来は薔薇色だと私は予想している。